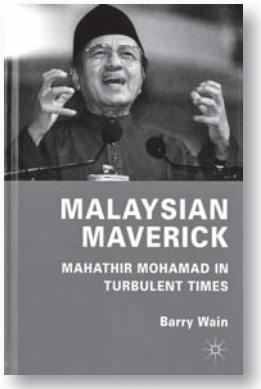
バリー・ウェイン著『マレーシアの一匹狼―波乱の時代のマハティール・モハマド』

Malaysian Maverick: Mahathir Mohamad in Turbulent Times.
By Barry Wain. Basingstoke, Hampshire, UK: Palgrave Macmillan, 2009. Hardcover: 363pp.

クー・ブー・テック

マレーシア内務省の検閲がバリー・ウェインの著書 *Malaysian Maverick: Mahathir Mohamad in Turbulent Times* の発売を差し止めている。これは当局がマハティール・モハマド元首相の巷説にまつわる虚像と実像とをすっかり混同していることの顕われといえよう。マハティール政権は、こと出版に対しては、歴代政権のなかで最も寛容な姿勢を見せた。こういうと驚く人もいよう（ただしマスメディアに対しては別である）。もしいま彼が首相の座にいたらこのような些細でたわいもない、いやがらせはおこらなかったろう。この件でウェインが激怒するとも思えない。ウェインは *Asian Wall Street Journal* 紙の前主筆でありこの本を書いたときはシンガポール東南アジア研究所（ISEAS）のビジティング・ライターであった。



この著作が提供する話題は豊富だ。マハティールが六〇余年公職に就き、二二年間、首相を務めたことを考えればさもありなん、である。彼が政治家として在職した間、一九六九年の彼自身のUMNO（統一マレー人国民組織）追放から、アンワール・イブラヒムの投獄（一九九八年）、そして二〇〇九年のアブドゥラ・バダウィの早期退任にいたるまで、血なまぐさいとは言わぬまでも「苛酷な政治」が行われた。

「マハティールの時代」（一九八一年七月～二〇〇三年一〇月）は、金権スキャンダルの発覚、「メガ・プロジェクト」（大規模投資事業）の実施、失敗に終わった企業民営化、そして多額の財政を投入しての再国有化、などが起こりマハティールの野心的な経済運営が際だつ「波乱の時代」であった。マレーシア情勢に関心をもつ広範な読者はこの本 *Malaysian Maverick* が、コンパクトでありながら最新情報を豊富に盛り込み、それらが時事的レポート、学術論文、マハティール自身や彼の知己（政敵も含む）とのインタビューという三つの主要な情報源を元に丹念に整理されていることに気づくだろう。

ネット上に掲載されたこの本への書評等を読むと、一九九八年～二〇〇〇年におきたレフォルマシ（改革）運動でマハティールを Mahafiraun（独裁者大ファラオ）と呼んで糾弾した時代ぐらいの記憶しか持ち合わせていないマレーシアの若者世代の心情をあおり立てていることがわかる。

反応はともかくとして、このウェインの著作は、情報がアップデートされているものの、マハティール政治について一般に知れわたっていること―無味乾燥な部分を含め―を明解に述べているが際だった修正を行っているわけではない。また、マハティールが首相であった時代に、非難の側に回った学者達、オンライン・ジャーナリスト、NGO活動家らが書かなかった批判的、政治攻撃的な分析を新たに追加するということもしていない。おそらく、その点は意図してのことだろう。序言の最初でウェインはつぎのように述べている。

「筆者はマハティール博士の業績を理論的な枠組みで分析することはしない。地上のレベルから（マハティール）を述べ、彼のこれまでの人生で起こった興味深く見逃すことができない出来事さらにはそれらが彼自身とマレーシアに及ぼした影響について『新鮮な見方』示すこととする。」

しかしながら、この「地上レベルからの新鮮な見方」が現在のマレーシアのネット大衆の草の根の

Malaysian Maverick: Mahathir Mohamad in Turbulent Times by Barry Wain reviewed by Khoo Boo Teik first appeared in English in *Contemporary Southeast Asia* April 2010, Vol. 32, No. 1 (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies), pp. 98-101. Translated with the kind permission of the publisher.

レンズを通して見る、と言いたいのだとしたら筆者は、彼の主張に疑を差し挟みたい。ウェインの視点はむしろアジア地域及び国際的英語メディア（特に *the Asian Wall St Journal*, *the Far Eastern Economic Review and Asiaweek*）の見方である。これらメディアとマハティールとは長年のつきあいがあり、とくに首相時代は最も強固な関係を築いたのであった。これら英語メディアは、外聞もはばからずあるときは国際的に読者層を広げるため、またあるときは引用数の向上を狙い、お互いに利用しあったり、論争を挑んでみたりした。

確かにマレーシア通と呼ばれるウェインの仲間達の多くは優秀なジャーナリストであり、第一級の研究レポートを発表してきた。だが、筆頭記者も出版社自身も独善的で相手を見下すような性格を持っていた。東南アジアの政治家が新自由主義にもとづく自由化、規制緩和の実施、企業民営化政策のための立法化にためらいをもつ場合、ダウ・ジョーンス傘下の主要紙誌はきまってそのような姿勢をとった。

マハティールは、先進国からの投資や借り入れを拒絶して社会からのけものにされるような人物ではなかったため英語メデイアは彼を毛嫌いはしなかった。しかし、マハティールが欧米の指導者の偽善にたいし歯に衣着せぬ批判を浴びせたため彼らがマハティールを賞賛することはなかった。メディアもマハティールには愛着がわかなかった。結果、英語メデイアは彼に「マーヴェリック」（一匹狼）というあだ名をつけることにした。しかし真実、マハティールは一匹狼なのか？　彼自身、「我が道」を行く男のイメージにうっとりとし自宅ではシナトラの懐メロを口ずさむといわれるのでよくこのあだ名はよく似合っているように見える。ウェインもこのメディアのイメージに同感している。柔軟なヴィジョンを持つがいざ実行となると頑固、権威主義であるが実利的、イスラーム化を理想としつつ近代化を推進する、ビジネス指向であるが仲間関係を大切にする、先進国のお金はウェルカムだが先進国の価値観はお断り、等々。またウェインはある箇所でマハティールを見当違いにも「無冠の帝王」と呼び直し、「マレーシアのマクロ経済の筋肉と体力を強固にしたが、制度をすべて骨抜きにしてしまった」、そしてマレーシアが耳目を集めるようになった反面、嘲笑に晒されることも多くなったと言っている。

ウェインのこの見解を受け入れることはご容赦願うとして、この本に盛り込まれた様々な情報を踏まえ深慮を巡らしてみると読者はマハティールがいかに非急進的で伝統重視派かがわかるだろう。国家の開発という面ではマハティールは第三世界の行き場のない欲求を的を得た言葉や行動で示していった。それは、世の中をひっくりかえすとはいかないまでも、後からやってきた者が陽の当たる場所＝まともな境遇を与えられる権利を主張するように、現在の資本主義の仕組みに異を唱えたのである。国の文化的特徴、民族の相違、国際的競争といったことがらに対するマハティールの視点は植民地主義的固定観念、社会的ダーウィニズムにより形成された。

経済問題に対処するに当たっては近代化論、構造主義、従属主義、東アジア・キャッチアップモデルなど様々な理論を場合場合で使い分けた。経済危機に直面した際にマハティールが示した行動ほど、皮肉にも彼の伝統主義的信念をさらけだしたものはなかった。一九八〇年代半ば経済の停滞に直面した際、マハティールは海外直接投資の誘致に救いの手を求めた。

最近の先進諸国の金融破綻においてはマハティール自身の手によるものではないが、東アジア通貨危機のときに彼がとった政策―緊急財政援助、増資、通貨再膨張など―の通貨、資本に関するあらゆる解決策が無責任にと言ってもいいほど、より大規模に実施されたのである。成功した先進国のモデルを必死に見習い先進国クラブに仲間入りすることがマハティールの一番の野望でないとしたならば、いったい彼は他に何を望んだだろうか？

非難の嵐を招いたマハティールの失策の中には、先進国の制度から学んで取り入れたものもあったと言えよう。その顕著な例をあげるとすれば、一九九七年の株価大暴落のおりクアラルンプール株式市場における企業買収の規約を改定し、経営不振に陥っていたUMNO系企業レノン社を守ったことであろう。この一件を遡ること、一九八一年、ロンドン株式市場でマレーシア政府が英系プランテーション企業の経営権掌握を目的に突然、株の大量買い占めに走ったことがある。ロンドン株式市場はその後、株買い付け規定の修正を行った。この買い占めはイギリスのメディ

アの嘲笑を買ったのであった。

一九八二年、Maminnco社（訳注Malaysia Mining Corp. 国の持株会社）の錫秘蔵がきっかけで錫の空売り人が逮捕されたとき―マハティールはこれを投機家を懲らしめるためと受け取った―、ロンドン金属取引所は「空売り人に罰金を支払わせ、彼らが法外な割増金を支払って謎のバイヤー（訳注Maminco のこと）からの錫を買い付けすることを防いだ」。これにより空売り人は赦免された一方で、―ウェインの筆は冷淡に進む―Maminncoは破産に追い込まれた。

この件でマハティールに弁明の余地はない。ウェインは、この「錫不法取引事件」と東アジア金融危機があたかも比肩しうる危難であるがごとく紙幅を割いている。しかし株や金属の取引市場で権勢をふるう先進国のゲームの達人たちが厳格な市場のルールを蔑ろにしている実態をマハティールが学んだかどうかについて触れていないのである。これでは読者への裏切だろう。

これらを背景としてマハティールの行動が、不安と自意識過剰の微妙な揺らぎに左右されていたとしてもマハティールの過ちや失敗がその、頑迷さと自制を欠いた気まぐれにからきていると判断するのはいかがなものであろうか。

経済と同様、政治においても、国内政治、外交の区別なく、マハティールは自分の掲げた目標や理想を実現する過程で躓くことがよくあった。重工業化の頓挫、企業民営化の失敗、一九八七年のＵＭＮＯの分裂、アジア地域イニシアティブ構想実現に対する米国の横やりなどをウェインは列挙している。しかしマハティールは、司法府の蹂躙、アンワルの追放、経済危機時の短期資本規制導入などに示されるように頓着しない便宜主義的行動や確信に満ちた度胸のよさで勝利を収めることも多々あった。

このようにみると大きな謎が頭に浮かぶ。マハティールは情勢を支配する傀儡師であったのはどこまでで逆にどこから先が自身の支配力より強大な社会・政治勢力の道具に甘んじていたか？　ウェインはこの問いを発していないし、マハティール研究者もジャーナリストもいまだかつて満足のいく回答を出すことができなかった。ウェインの本に盛り込まれた新しい情報が当座の答えの根拠を提供している。

ＵＭＮＯのビジネスとの関わりについてウェインはインテング・ラザレフとダイム・ザイヌディンという二人のＵＭＮＯの前財務部長に注目し、インタビュー取材を行っている。テングとダイムは互いに相手の役割と責任の所在を言い争っているが両人ともマハティールには言及していない。彼の庇護の下でビジネスと政治とのつながりは強まったという点では誰もが疑わないにもかかわらずである。加えて、マハティールは資本主義の前衛たる企業家の育成を目論んだ。しかし、成功したえり抜き企業家は単に寡頭的（多民族）企業集団を形成しただけに終わった。結果的には、マハティールは外貨の投機家達をコントロールできなかったのと同様に国内の仲間内企業のコントロールもできなった。

それら企業が国からの補助金に頼ってビジネスを行い不当に利益を得てきたことで韓国型工業化の実現という元首相の大いなる願望はしぼんでいった。また通貨の投機家による市場での略奪行為はグローバリゼーションへの参加の理想的手段として位置づけられたマルチメディア・スーパー・コリドー計画をおしつぶした。

話はそこで終わらない。二〇〇九年のＵＭＮＯの総会にマハティールが出席したことに関するウェインの結論では、マハティールが会場の参加者から受けた拍手喝采が一匹狼の権力の座への復帰の前触れであるとの印象を読者に植え付けている。だとしたら形式と実態との混同であろう。

一九九八年、マハティールは情け容赦なく周囲の了解も取らずにアンワルをＵＭＮＯから追放した。二〇〇九年、アブドゥラを党総裁の座から引き下ろす一派を惜しげもなく支持している。二〇〇四年以降の総会では毎年、ＵＭＮＯはマハティールのヴィジョン二〇二〇―連立選挙のたびに勝利に導いた思想的アピール―を非難してきた。二〇〇八年三月に行われた総選挙でのＵＭＮＯの退潮はひとつの帰結である。

二〇〇九年ＵＭＮＯ総会でマハティールに拍手を送った党員の面々はマハティールがもうなんら役にたたない存在―一〇年昔、レフォルマシの活動家たちが彼をそうあざけったものだった―であり、彼が築きあげてきた遺産を解体してしまったのは自分たちであることさえわかっていないのである。

（Khoo Boo Teik／アジア経済研究所地域研究センター上席主任研究員、日本語訳　編集部）